



TITLE:

## 【写真集】 第4章: 新制京都大学の 発足

AUTHOR(S):

京都大学百年史編集委員会

---

CITATION:

京都大学百年史編集委員会. 【写真集】 第4章: 新制京都大学の発足. 京都大学百年史 : 写真集 1997: 074-108

ISSUE DATE:

1997-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/152882>

RIGHT:



第13代総長鳥養利三郎(1887~1976)。敗戦直後の混乱から戦後の教育改革に至る困難な時期に総長をつとめ、新制京都大学の体制作りに尽力した。(4-2)



## 文部省當局も 教授の自由認む

大學の自治全く回復

### 大京事案件決

鳥養利三郎総長談話

鳥養利三郎総長は、15日午後、記者団と懇談し、敗戦後の教育改革について、大学自治の回復が第一であるとの見解を示した。鳥総長は、戦前、戦中の大学は、国家主義の束縛の下に、教授の自由が制限されていた。戦後は、民主主義の精神に基づき、教授の自由を尊重し、大学の自治を回復しなければならない。鳥総長は、文部省の意向を尊重しつつ、大学の自治を回復する方針を示した。

京都帝国大学

教授会自治に関する前田文相と鳥養利三郎の確認事項メモ。3行目の挿入部分「責任ある自治的慣行」は前田文相のたつての希望で付け加えられたもの。(4-4)

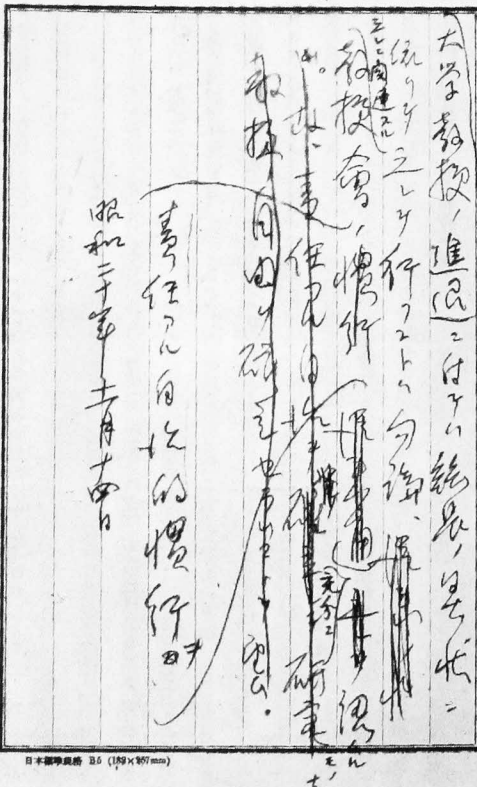
## 萬世のため太平開く

遺家族に對し畏き御言葉  
けふ正午詔書を御放送

## 龍顏に御手あて給ふ

聖斷降る歴史的御前會議

## 嗚呼・一億慟哭 閣下に恐懼深謝



日本標準規格 B5 (182×105mm)

# 敗戦と京都帝国大学

日本のポツダム宣言受諾と無条件降伏の決定により、1945(昭和20)年8月15日、第二次世界大戦が終結した。この敗戦は満州事変以来の十五年戦争と呼ばれる侵略戦争の終結でもあり、国の研究・教育の中心機関の一つであった京都帝国大学もそれまでの体制を根本から見直す必要に迫られたのである。

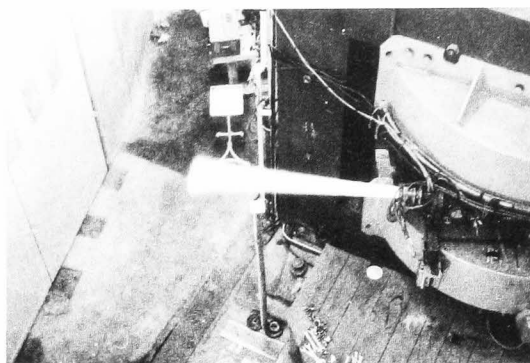
連合軍の進駐に先立ち、出征あるいは勤労動員されていた学生の復学がまず決定された。進駐後は連合国最高司令官総司令部(以下GHQ)の指令に基づき改革が進められたが、1945年10月22日発令の「日本教育制度の管理」に関する指令は教育現場に直接戦争責任を問う大きな二つの改革を含んでいた。一つは極端な国家主義・軍国主義的教官の追放、いわゆる適格審査の実施であり、京大でも学内審査会で審査が行われた。もう一つは逆に自由主義的言動で解職された教官の復職である。京大では滝川事件との関連から、当時の総長鳥養利三郎が前田多門文部大臣との直接交渉で教官人事における教授会の自治権を確認し、これを受けて滝川幸辰らの復職が実現した。

敗戦による研究への影響は、理科系の航空関連講座や文科系の国策協力的講座が改廃されたのを始め、理学部では原爆開発に関わったというGHQの判断により、建設中のサイクロトロン(粒子加速器)が占領軍の手で琵琶湖に廃棄された。また楽友会館や花山天文台、演習林上賀茂試験地が接収を受けたほか、台湾・朝鮮・樺太に所有していた演習林を失ったのである。

昭和二十年十月三日	學第 號	月 日 發送	淨寫	校合
<p>復員學生と語る夕</p> <p>一日時 十一月十四日午後六時</p> <p>場所 西部橋内 室</p> <p>司會 學生部長 木村孝衛 教授</p> <p>中込 十一月十四日(秋) 正午に同窓會事務室に</p> <p>中込</p> <p>同窓會</p>				
<p>總務課長 佐藤 孝</p> <p>會計課長 山本 一</p> <p>學生課長 山本 一</p> <p>事務局長 山本 一</p> <p>學生主事 山本 一</p> <p>法學部部長 山本 一</p> <p>經濟學部部長 山本 一</p> <p>學生課 山本 一</p> <p>庶務課 山本 一</p> <p>會計課 山本 一</p> <p>學部 山本 一</p> <p>經濟學部 山本 一</p> <p>同窓會主催標記 件九案通り開催相成可然故</p> <p>歸學ヲ迎フル會開催件</p>				

復員學生關係の催しの一件書類。敗戦後間もなく同窓會主催で行われた「歸學ヲ迎フル會」「復員學生と語る夕」の開催に関するもの。(4-5)

2代目サイクロトロン。1955年に、東山区蹴上(けあげ)に現存する明治期の煉瓦造建築の旧水力発電所内に再建された。(4-6)



現存する初代サイクロトロンボール・チップ。建設中のため本体と離れた所に置かれていたので占領軍の廃棄を免れた。(4-7)



上質茂の京都ゴルフ場(1950年ごろ)。1949年2月に占領軍によって接收された上質茂の演習林試験地に建設された。当時は進駐軍やその関係者しかプレーできなかった。(4-8)

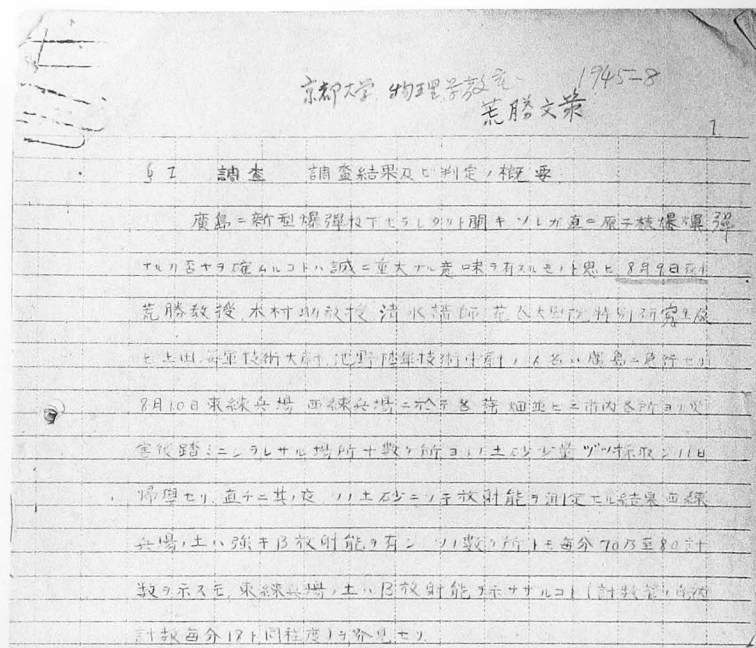
# 原爆災害調査班の活動と遭難

1945(昭和20)年8月6日、米軍によって広島に「新型爆弾」が投下されると、日本の軍部・政府は直ちに被爆地の調査を関係方面に依頼した。京大においても、原子核物理学の研究を行っていた理学部物理学教室の荒勝文策教授と、医学部病理学教室の杉山繁輝教授が依頼をうけ、10日には広島入りした。調査団は、土の採取、遺体の解剖等を行う、広島の被害が原子爆弾によるものであることを確認した。

その後、8月27日、中国軍管区司令部より、被爆者の調査および治療対策の樹立のため研究員派遣の要請があり、杉山、舟岡省五(解剖学)、菊池武彦(内科学)の3教授を中心とし、理学部からも要員が加わって、京都大学原子爆弾災害総合研究調査班が編成された。調査班は早速広島へ赴き、被爆者の診療および調査研究を行った。40人以上に及ぶ班員たちは、献身的なおかつ冷静に職務を遂行し、診療した患者は合計2,000人をこえた。

ところが、9月17日、未曾有の暴風雨が西日本を襲い、調査班が滞在していた大野陸軍病院が山津波に見舞われ、多くの患者とともに11人の班員が殉職した。枕崎台風と呼ばれるこの暴風雨では、広島県下で2,000人以上の死者がでたが、これは被爆・敗戦による混乱で気象データや防災態勢が不備であったことが大きな原因といわれている。

この遭難のため、京大の調査班は調査研究を一時打ち切った。しかし、京大関係者をふくむ研究者たちは、以後も数年にわたって根気強く原爆災害の調査研究を続行し、多くの報告がまとめられることとなった。

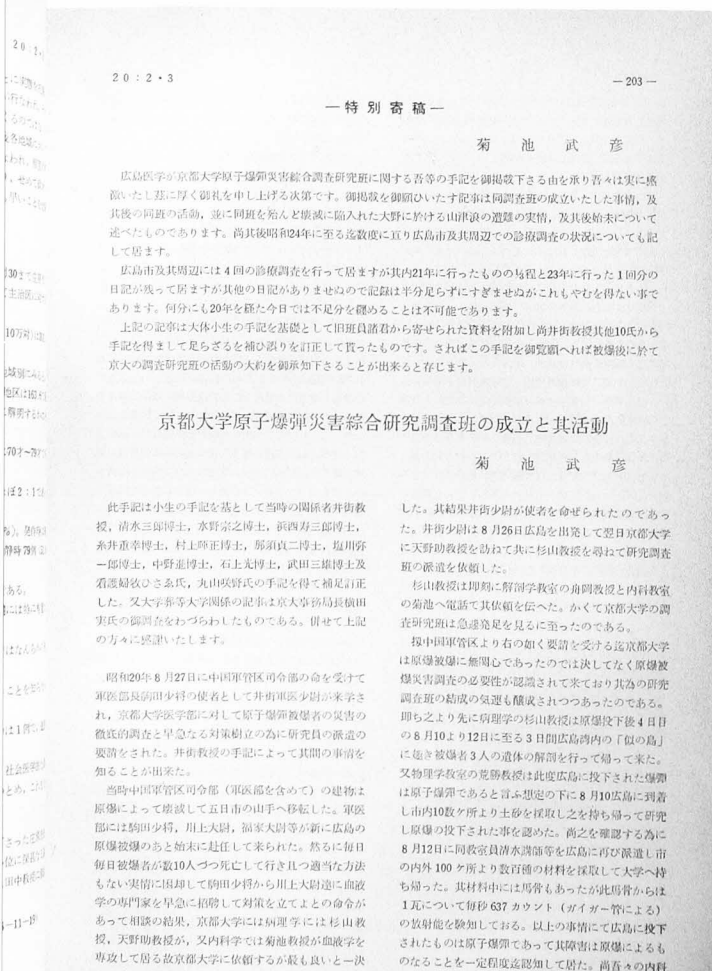


荒勝教授の報告書。土壌等の測定結果から「新型爆弾ハ「ウランウム」原子爆弾ナリト判断セリ」と述べられている。(4-9)

被爆後の広島。(4-10)



菊池名誉教授による調査班に関する記録。「広島医学」第20巻2月3月合併号に掲載。(4-11)



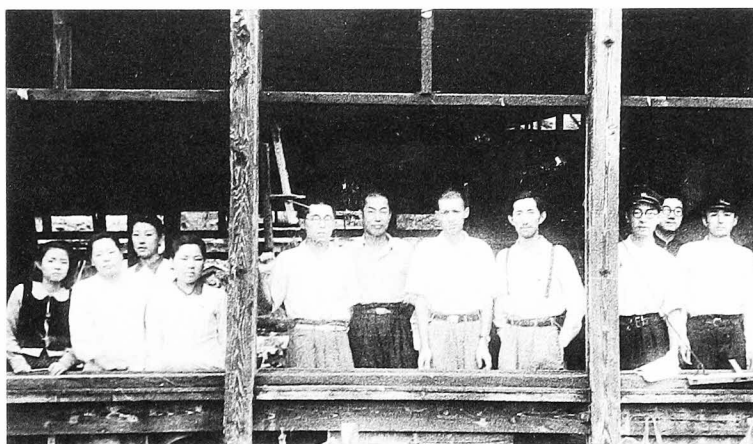




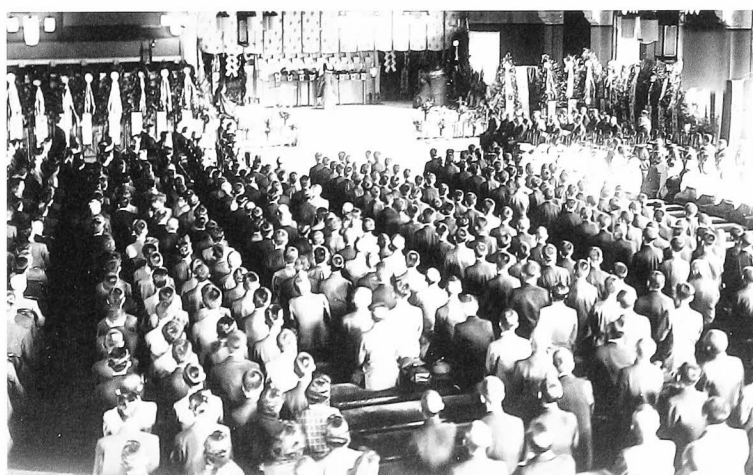
調査班が本拠地とした大野陸軍病院。(4-12)



山津波で倒壊した大野陸軍病院。(4-13)



調査班牛田地区診療班。  
班員の一部は、広島市内  
の牛田国民学校校舎で診  
療を行っていた。(4-14)

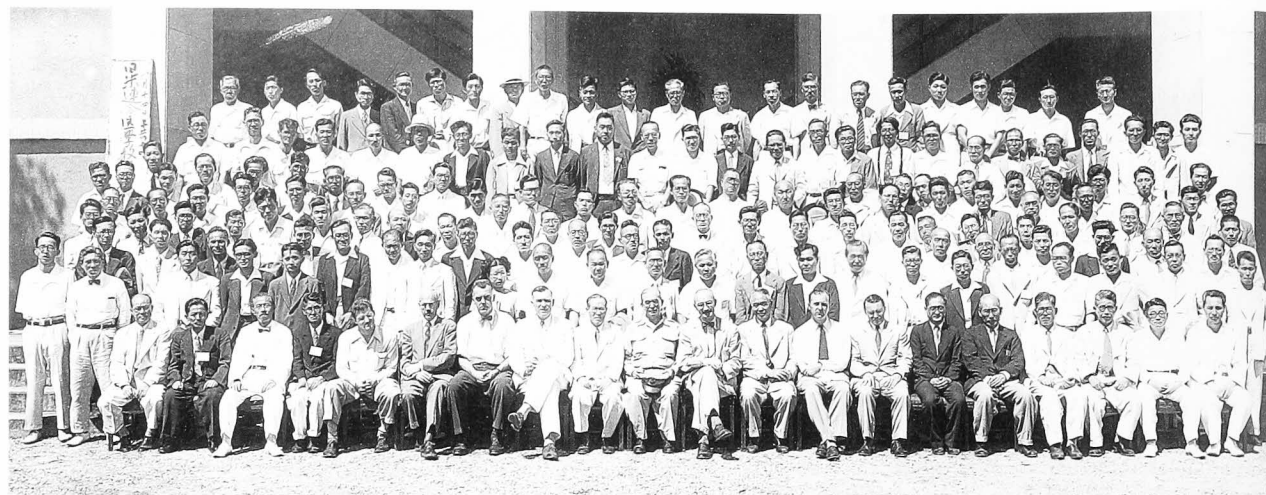


調査班遭難者の大学葬。  
10月11日、時計台2階大ホ  
ールで執り行われた。  
(4-15)



京都大学原子爆弾災害総  
合研究調査班遭難記念  
碑。1970年、現地大野町  
に建てられた。(4-16)

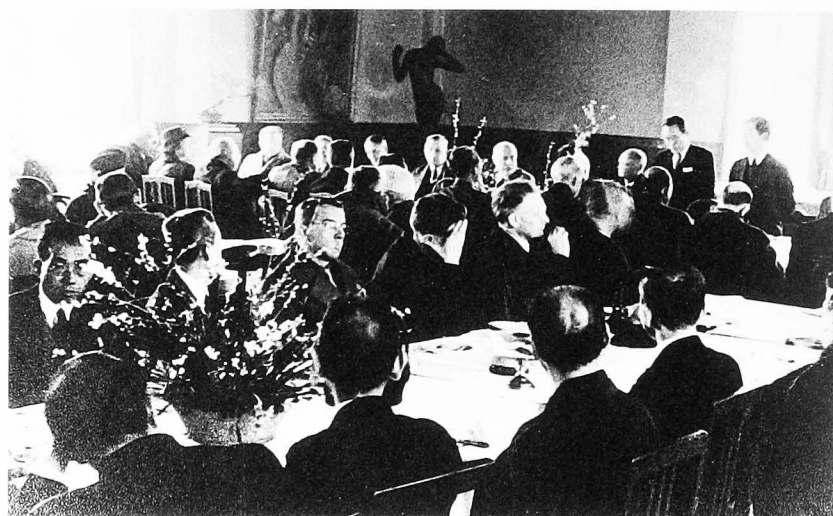
# 新制京都大学の発足 学制改革



日米連合医学教育者協議会開会時の記念撮影(1946年)。旧医化学教室本館前にて。専門高等教育改革の一環として招聘された対日医学教育使節団による講習会が京大で開催された時のもの。京大は関西の教育機関の中心として改革に伴う様々な講習会等の開催を引き受けていた。(4-17)

戦後の教育改革は第一次米国教育使節団の来日に始まる。約1カ月間全国各地の教育現場を視察してまとめた報告書は、事実上改革の方向を決定した。GHQに提出されたこの報告書では、改革の基本方針や具体的な方策が勧告されており、高等教育に関しては広く国民に機会を開放すべきであるとして、従来の「少数者の特権」としてのあり方を批判している。これを受けて日本側は教育刷新委員会を中心に実際の改革を進めていった。まず学校教育法の下に6・3・3・4制を採用して進学体系を単線化した。これにより大学の修業年限は延長されたが従来の高等学校が廃止と決まったため、高等教育自体は6年から4年へと短縮された。京大ではこれに伴い第三高等学校との合同を決定した。さらに男女共学の原則に基づき1946(昭和21)年度には創立以来初の女子学生17人の入学を許可している。そして1947年には帝国大学令に代わる国立総合大学令の公布に合わせて「京都帝国大学」という名称を「京都大学」に改めた。続いて教育学部の新設や一般教育課程の導入などを経て、1949年に新制京都大学が発足したのである。しかし1953年までは制度の移行期間で旧制と新制が併存するという変則的な体制であった。

新制京都大学の発足は、改革の検討期間や財政的な裏付けが甚だ不十分な中で再出発であった。入学者の増加に対応した教官数や施設設備の拡充、新たな教育理念を反映した具体的な教育法の研究や実施など多くの問題が課題として残されたのである。



第一次米国教育使節団来学時の会合風景。1946年3月18日に来学した一行25人はまず当時時計台内にあった教官食堂で総長・各学部長らと会合を持った。その後学内を視察し、清風荘でのレセプションではお茶席が設けられた。(4-18)



第三高等学校の校銘板が降ろされる瞬間。1950年3月31日、学制改革により三高は80年に及ぶその歴史に終止符を打った。当日の解散式には多くの同窓生が校舎に集い母校との別れを惜しんだ。その最後に島田退蔵校長の手により校銘板が降ろされた。(4-19)



三高解散式後のファイアストーム。若手同窓生主催で行われ、会場のグラウンドには三高関係者のみならず吉田界限の人々を始めとした一般市民が幾重にも取り巻いていたという。(4-20)



新制京都大学第1期の文学部学生。(4-21)



1950年度工学部  
受験証票。(4-22)

新制京都大学発足関連年表。(4-23)

- 1946 3.18 第一次米国教育使節団来学
- 8.10 教育刷新委員会設立、鳥養総長委員に就任
- 1947 3.31 教育基本法・学校教育法公布、  
6・3・3・4制の導入決定
- 9.30 帝国大学令の国立総合大学令への  
改称に伴い「京都大学」に改称
- 1948 2.28 第三高等学校、京都大学との合同の受け入れ決定
- 1949 5.31 国立大学設置法公布により  
新制京都大学発足、教育学部設立
- 7. 7 新制京都大学第1回入学式
- 8.25 分校規程制定
- 9. 8 吉田分校開校
- 1950 3.31 第三高等学校閉校
- 5. 1 宇治分校開校
- 12.22 教育学部規程制定

新旧学制下における大学進学者の一般的学校系統の比較図。旧制は諸学校令によるそれぞれの規程が定着する1921年4月現在の学制に拠ったが、これ以外のコースによる大学進学者もいた。□は義務教育年限を示す。(4-24)



## 初“乙女学生”の入学宣言式へ

終戦後初の「乙女学生」は、入学式で無言の誓いを立てた。

昭和十九年九月、京都大学は、戦時体制下の教育政策に従って、女子学生の入学を禁止していた。しかし、戦後、教育政策が変化した。昭和二十一年九月、京都大学は、戦時体制下の教育政策に従って、女子学生の入学を禁止していた。しかし、戦後、教育政策が変化した。昭和二十一年九月、京都大学は、戦時体制下の教育政策に従って、女子学生の入学を禁止していた。しかし、戦後、教育政策が変化した。



初“乙女学生”の入学を報じる新聞記事(『京都新聞』1946年5月16日付)。1946年5月15日、創立以来初めての女子学生が入学宣言式に臨んだ。当時世間一般の彼女らへの関心は高く、新聞なども事あることに取り上げている。しかし実際の学生生活では受け入れ体制も万全とはいえず様々な苦労があった。(4-25)

希望が叶った喜び。乙女学生は、入学式で無言の誓いを立てた。昭和二十一年九月、京都大学は、戦時体制下の教育政策に従って、女子学生の入学を禁止していた。しかし、戦後、教育政策が変化した。昭和二十一年九月、京都大学は、戦時体制下の教育政策に従って、女子学生の入学を禁止していた。しかし、戦後、教育政策が変化した。

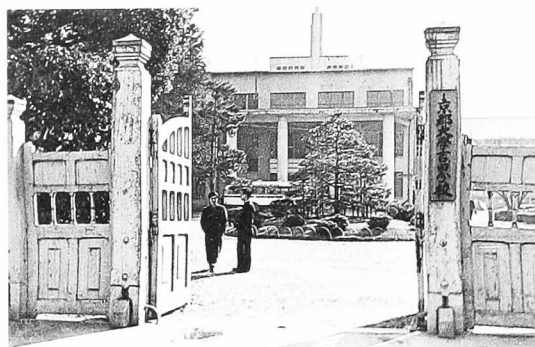
希望が叶った喜び。乙女学生は、入学式で無言の誓いを立てた。昭和二十一年九月、京都大学は、戦時体制下の教育政策に従って、女子学生の入学を禁止していた。しかし、戦後、教育政策が変化した。昭和二十一年九月、京都大学は、戦時体制下の教育政策に従って、女子学生の入学を禁止していた。しかし、戦後、教育政策が変化した。



# 新制京都大学の発足 一般教育・教育学部

一般教育課程の導入は、民主主義社会の構成員にふさわしい人間の養成の場を大学教育の中に設けようとしたものであった。これは戦前の専門教育偏重への反省という当時の立場を反映して、幅広い知識の習得により自らの思考と判断で行動する人間の養成を意図していた。だが具体的には人文科学・社会科学・自然科学の各系列から所定の単位を履修する形態がとられ、新たな理念を反映した教育のあり方はついに生みだされなかった。こうした一般教育課程をどのように大学組織に組み込むかは各大学で試行錯誤されたが、東大が「教養学部」となったのに対し、京大では「分校」(1954年から教養部と改称)という独自の学生を持たない組織になった。この「分校」は宇治の旧陸軍火薬廠跡と旧三高構内に設置され、宇治分校には1回生、吉田分校には2回生がそれぞれ配属された。

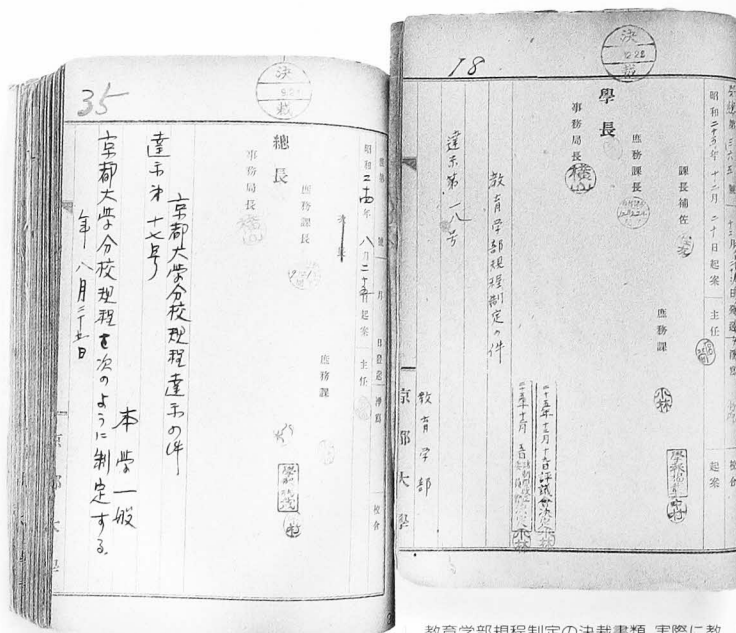
民主主義教育の実践者は幅広い教養を持った民主主義的人間でなければならないとの観点から、戦後教員養成は大学教育の中で行われることになった。京大では従来、文学部哲学科の中に教育学教授法講座があった伝統もあり、教員養成ではなく教育自体や教育方法の学問的研究に主眼をおく学部づくりが進められ、1949(昭和24)年の新制発足と同時に教育学部の第1期生が入学した。教育学部は当初から学生を少なく採る方針で、学生同士の連帯感が強く、和気あいあいとした独特な雰囲気が残された写真からもうかがえる。



吉田分校正門。旧第三高等学校の正門を引き続きそのまま使用した。(4-26)



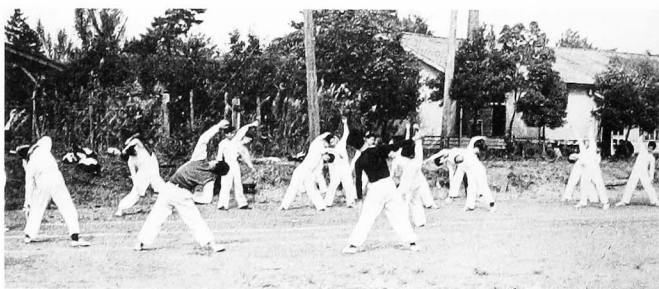
宇治分校正門。現在の宇治構内の正門より南側にあった。両側に松の生い茂る一本道の構内道路が延々と続いている。(4-27)



京都大学分校規程制定の決裁書類。書類は「京都大学」名の形式だが、まだ「総長」名で決裁されている。(4-28)

教育学部規程制定の決裁書類。実際に教育学部が発足したのは1949年5月で7月には第1期生も入学していた。その後学部機構が整備され、規程も約1年半遅れて制定された。なお新制移行後「総長」から改称された「学長」名で決裁されている。(4-29)

宇治分校での体育実技の様子。新制大学になって初めて大学教育の中に体育実技が取り入れられた。一般教育の必修科目であった。(4-30)



吉田分校と宇治分校を結ぶ連絡バス。当時は1日4往復運行され、教官はこれを利用して片道40分かけて両校を往き来した。宇治構内にて。(4-31)



文化祭心理テスト実行員。教育心理学専攻者によるものと思われる。(4-32)



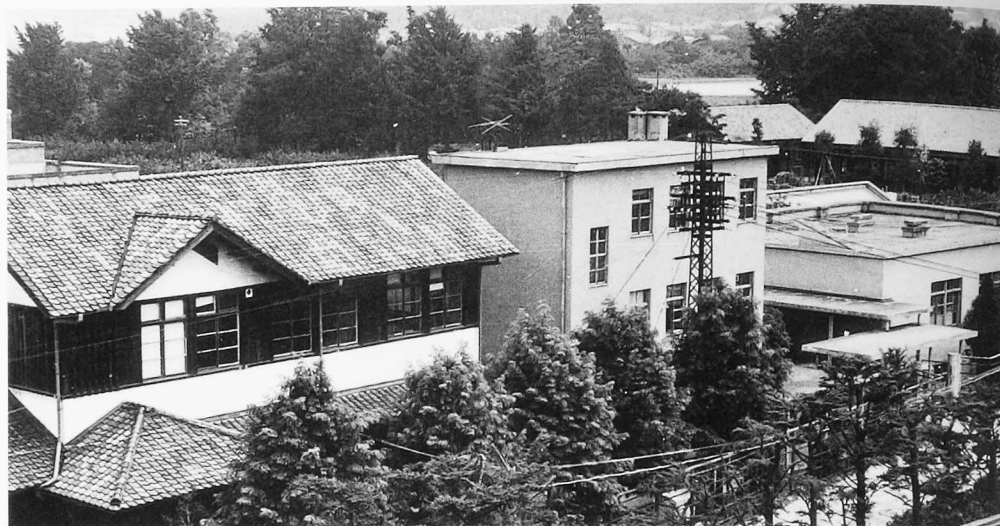
教育学部のハイキング。教育学部は少人数制で女子学生の割合も高くアウトホームな雰囲気が特徴的であった。(4-33)



教育学部熊野校舎での新入生歓迎会の様子。(4-34)

教育学部熊野校舎。1956年5月に熊野神社向かいの旧鐘紡上京工場跡地に建てられた教育学部初の専有校舎。当時は「軽量鉄骨」を用いた建築のモデルケースとして注目された。現在この地には京大熊野寮がある。(4-35)





旧食糧科学研究所。設立当初建物施設の予算が認められず、財団法人生産科学研究協会が農学部へ寄贈していた木造建物(写真左側)を譲り受けた。その後果樹園の一部の割愛を得て鉄筋コンクリート造りの建物が増築されたが、1970年に宇治橋内に移転している。(4-36)

鳥養 経国 防災

鳥養利三郎書「防災経国」。防災研創設時の学長が10周年に寄せた揮毫。鳥養学長をして「肉弾三勇士」といわせた創設者の佐々・石原・棚橋の3教授の意気込みに感じて書かれたといわれている。(4-37)

防災研究所宇治川水理実験所。結核研究所が1949年に買収していた伏見区の旧火力発電所跡の土地建物を1951年に譲り受け、翌1952年に発足した。河川・海岸などの水や土に関する実験施設が置かれている。(4-38)



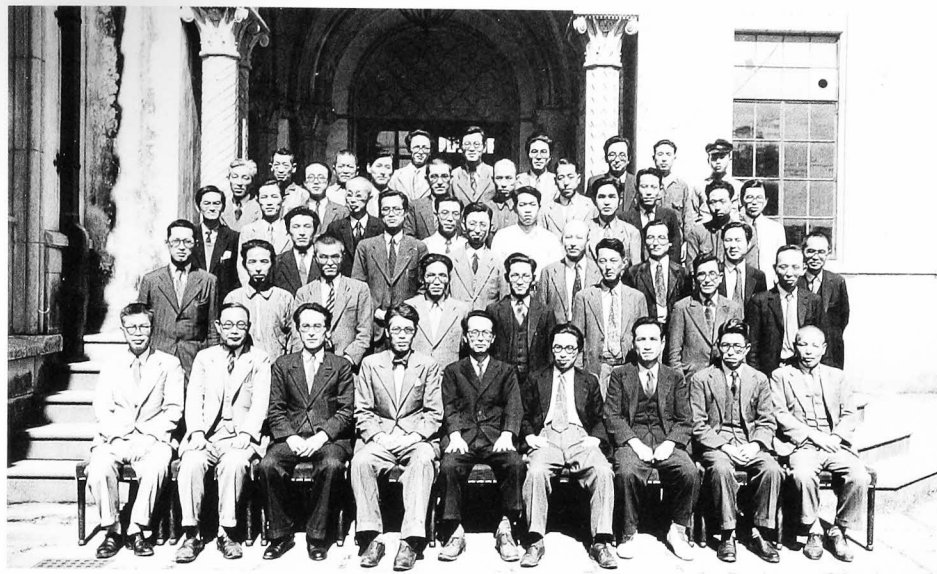
## 附置研究所の新設

敗戦直後、山積した諸問題の解決に多分野の研究者を擁する総合大学を設立するため、総合研究体制を発足させる気運が高まった。京大では1945(昭和20)年11月29日に京都帝国大学総合研究体制要項を制定し、総長を統括者として人文科学・自然科学両分野にわたり研究事項別に学部枠を越えた研究班が編成された。この体制自体は大学組織が改革を迎える中で自然に解消されていったが、研究のいくつかは新たな附置研究所設立の先駆けとなったのである。

まず1946年9月に食糧科学研究所が深刻化する食糧問題を背景に設立された。この研究所は戦時中に設置が決まっていた南方科学研究所(註1)が改案されてできたもので、食糧の増産はもちろん、加工・利用・貯蔵についての基礎および応用研究を目的に設立された。

続いて1951年には、災害の予防と軽減に関する研究を目的に防災研究所が設立された。自然地理的にみても日本は災害多発国だが、当時は科学的研究の対象として「防災」を捉える意識が薄かったといわれている。「防災」という学問分野の確立に防災研の果たした役割は大きい。

人文科学研究所は1949年に東方文化研究所・西洋文化研究所と合併して拡大再編成された。新しい人文研では、個人の研究のほかに共同研究を重視するというユニークな方針がとられ、いくつもの学際的な研究成果が生まれた。



統合後の人文研スタッフの記念撮影。共同研究に重点を置く独自のスタイルで一時代を築いた戦後人文研の基礎を固めた世代。前列向かって左より4人目は桑原武夫、続いて統合後初代所長をつとめた安部健夫。(4-39)

(註1) 日本が占領統治していた南方諸地域の開発のため、総合的な学術調査研究を行うことを目的に1945年3月に設置が決まった附置研究所。しかし戦局の悪化のため実現は遅れ、戦後廃案寸前になっていた。

統合後人文研本館となった旧東方文化研究所(1930年竣工、武田五一・東畑謙三設計)。北部構内東側の北白川に建つスペイン・ミッシン様式の瀟灑な洋館で現在は人文研附属東洋文献センターとなっている。このデザインは第11代総長でもあった浜田耕作の発案といわれている。(4-40)



統合後分館となった旧西洋文化研究所(1934年竣工、村野藤吾設計)。戦時中に独逸文化研究所として免足し、戦後は1952年まで進駐軍に接収されていた。現在の人文研本館の場所にあった。(4-41)



拜啓 春暖の候、いよいよ御健勝のこと、お慶び申し上げます。さて、舊来の人文科学、東方文化及び西洋文化の三研究所は、この度発展的な解消をとげ、新しい人文科学研究所一本として再發足することに相成りました。この機会において私ども舊三研究所の代表者はこれまで三研究所それぞれに對して寄附されてきた各方面の御好意に對して心からなる感謝の意を表すると同時に、併せて新研究所の今後の發展のために一層の御協力も人々ことを御願ひする次第であります。

昭和二十四年四月 日

殿

人文科学研究所長 安部 健夫  
東方文化研究所長 羽田 亨  
西洋文化研究所所長 鳥養利三郎

この三研究所の合併は、戦時中から人文科学研究の中心となつて來た。戦時中は、東洋文化研究所、西洋文化研究所、東方文化研究所の三研究所が、それぞれ異なる方向で研究を進めて來た。戦後は、これら三研究所を統合し、新しい人文科学研究所として再發足することになった。この合併は、戦時中から人文科学研究の中心となつて來た。戦時中は、東洋文化研究所、西洋文化研究所、東方文化研究所の三研究所が、それぞれ異なる方向で研究を進めて來た。戦後は、これら三研究所を統合し、新しい人文科学研究所として再發足することになった。

人文科学研究所所員一同

京都府京都市北区白川小倉町一〇

京都府京都市北区白川小倉町一〇

京都府京都市北区白川小倉町一〇

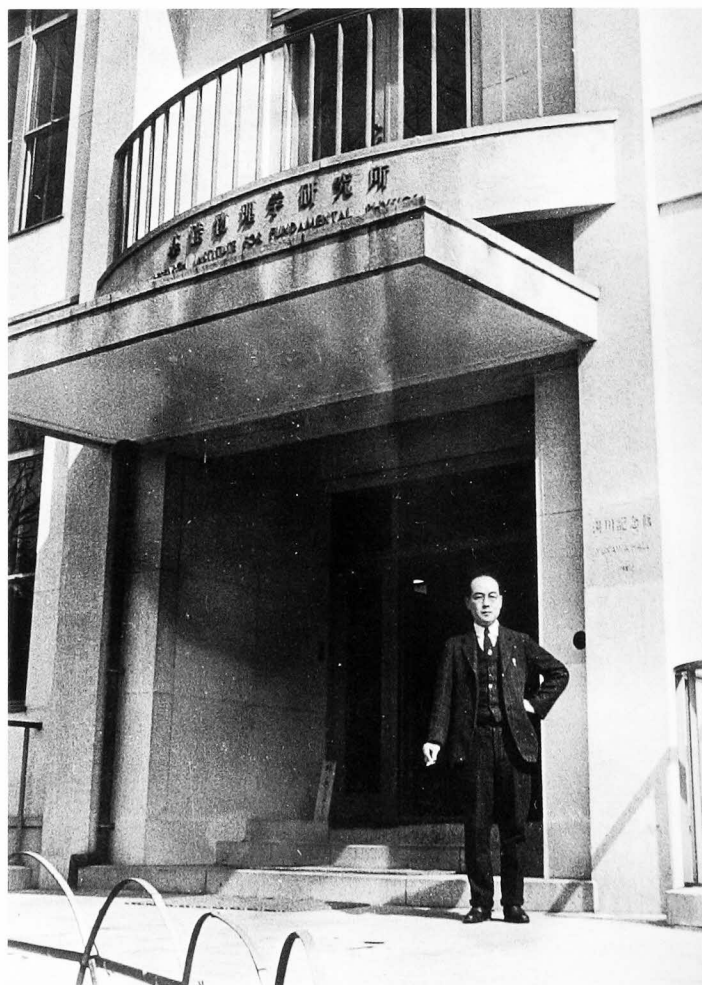


# 湯川秀樹と基礎物理学研究所



ノーベル賞を授与される湯川秀樹。1949年12月10日ストックホルムでスウェーデン皇太子よりノーベル物理学賞を授与される瞬間。(4-43)

創立当初の湯川記念館(1952年竣工、森田慶一設計)。北部構内に受賞を記念して建てられた。基研創立時から基研の建物として使われているが建物自体の正式名称は今も湯川記念館である。(4-44)



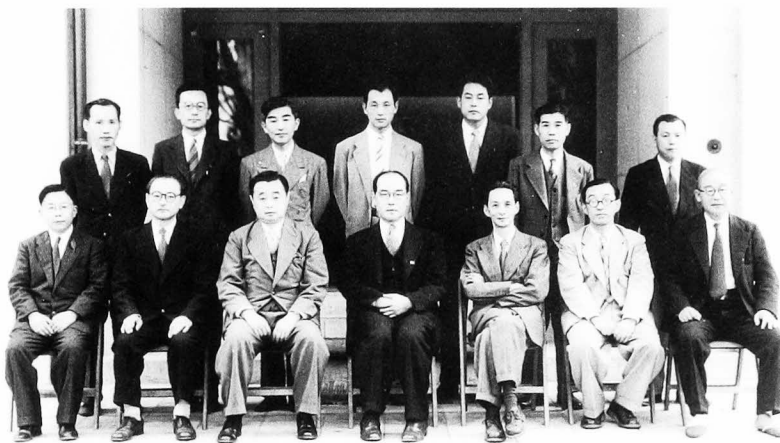
基研玄関前に立つ湯川秀樹。基研発足1年後の1954年頃のスナップ。玄関上部には「基礎物理学研究所」の銘が置かれ、向かって右の壁には「湯川記念館」の銘板が見える。(4-45)

1949(昭和24)年11月3日、理学部教授湯川秀樹の中間子論によるノーベル物理学賞受賞が決定した。占領体制が未だ続くなかでのこの朗報は、日本の学界のみならず一般国民にも自信と希望をもたらしたのである。

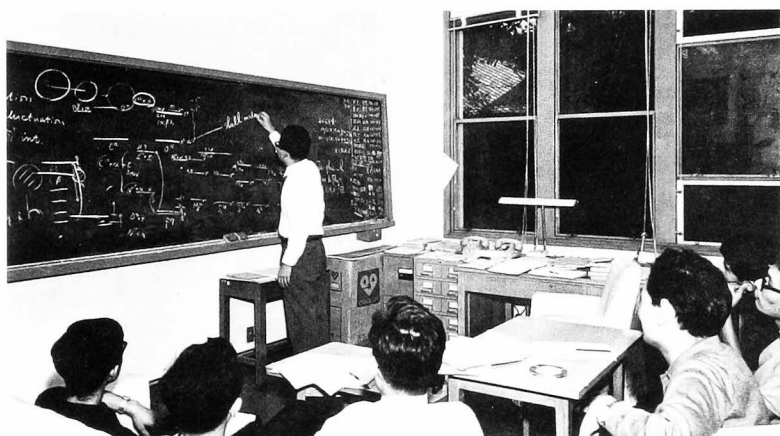
京都大学では受賞を記念し「湯川記念館」の建設とそこを拠点とした学術振興事業を計画したが、学外でも同様の計画が持ち上がっていた。そこに、記念館を理論物理学における全国を中心機関にしたいとの湯川自身の希望もあって、国立大学施設としては前例のない、学内外の研究者に開放された研究所が京大に附置されることとなった。1952年には北部構内に記念館が完成し組織の基礎づくりが始まった。そして翌1953年8月正式に京都大学基礎物理学研究所(以下基研)が全国共同利用研究所として発足し、湯川が初代所長に就任した。基研は組織の性格上、学外との人的交流を重視する方針で、所員の任期制を採用するほか運営委員に学外者のポストを置いている。こうした方針の背景には湯川を始めとした設立当初の委員の構想の中に、将来基研を米国のプリンストン高等研究所のような研究機関にしたいという大きな理想があったといわれている。基研設立直後の1953年9月には国際理論物理学会議が京大などを会場に開催された。戦後日本初の大規模な国際会議の開催であり、その準備や運営は基研のその後の研究活動のあり方に大きな影響を与えたのである。



プリンストン高等研究所構内を散策する湯川秀樹。湯川の左はアインシュタイン。プリンストンは基研のモデルに考えられていた機関であり、アインシュタインと湯川はその後の平和運動でも深いつながりを持った。(4-47)



発足間もない頃の基研関係者。湯川の向かって右隣は学生時代からの同窓である朝永振一郎(後にノーベル物理学賞受賞)。発足当初から学外の研究部員をつとめ、基研の構想づくりでは湯川を助け中心的役割を果たした1人である。(4-46)



所員研究室での研究会の様子。いつでも討論会や研究会が開けるように各部屋に黒板が備えつけられていた。(4-48)



基研図書室でくつろぐ外国人学者たち。国際理論物理学会議は京大の基研・人文研・楽友会館を会場に行われ、海外からも約60人の学者が参加した。この会議への一般の関心は非常に高く新聞でも大きく報じられ、開催のための募金には小学生までが寄付したという。(4-49)

## PROGRESS OF THEORETICAL PHYSICS

(Founded by H. Yukawa in 1946)

Volume 9 Number 1

January 1953

Published by  
The Yukawa Hall

with the cooperation of  
The Physical Society of Japan

“PROGRESS OF THEORETICAL PHYSICS” 表紙。1946年湯川が個人で発刊した欧文の学術雑誌。1953年から基研での編集になるが、この時期日本人の研究を世界に紹介する数少ない機会を提供していた。(4-50)

# 学園新聞

創刊 二十二年四月一日  
 発行所 東京大学  
 印刷所 東京大学印刷局  
 代印所 東京大学印刷局  
 代印所 東京大学印刷局

## 創刊に寄す

「学園新聞」は、戦前、戦中、戦後を通じて、常に「学生運動」の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦前は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦中は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦後は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。

## 学園再建 学生運動統一組織なる 全国的運動に発展せん

全国的運動に発展せん

「学園新聞」は、戦前、戦中、戦後を通じて、常に「学生運動」の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦前は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦中は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦後は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。

## 全京都学生同盟発足す

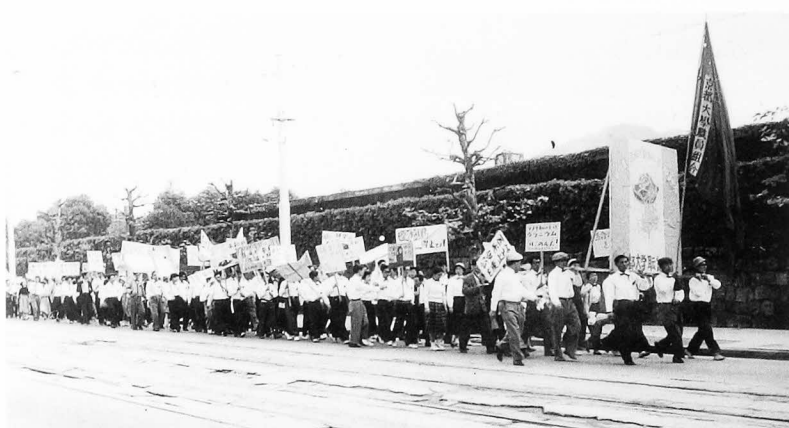
「全京都学生同盟」は、戦前、戦中、戦後を通じて、常に「学生運動」の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦前は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦中は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。戦後は、学生運動の中心的存在として、その発展に貢献してきた。

## 起る上る学園



「学園新聞」第1号(1946年4月1日付)。(4-51)

東大路通を進む職員組合のデモ(写真は1955年ごろ)。(4-52)



附属図書館前の学生集会。(4-53)

## 学内の諸運動〈1〉

敗戦後の民主化が進むなかで、京大においても種々の団体が改編や誕生を迎えた。

1946(昭和21)年1月には工学部に職員組合連合支部が結成された。その後、順次支部がつくられていったようだが、1948年3月に、全学にわたる京都大学職員組合が誕生した。結成大会で職員組合は労働条件の維持改善、経済的地位の向上、学園民主化等を決議し、以後教職員の運動の中心的存在となる。

大学関係者の生活を支える生活協同組合の設立は1949年5月であった。生協設立当初は学内に個人経営の食堂なども残っていたが、生協は次第に事業を拡張し、1957年には法人化も認められ、現在の姿になっていった。

戦前から発行されていた『京都帝国大学新聞』は、1944年に全国唯一の学生新聞である『大学新聞』に統合されていた。敗戦後、関係者は京大の新聞の復活を目指したが、用紙不足等の理由で、関西一円の学生を対象とする新聞ということで、『学園新聞』として1946年4月に復刊することになった。

また戦時期には自治的活動がほとんど不可能であった同学会でも、早くから改組が討議され、1946年12月には規則が改正されて選挙された学生の委員が中心となる組織になった。当初同学会は敗戦直後の生活難を反映して、もっぱら経済的問題をスローガンとしていたが、1949年に左派が主導権を握り、レッド・パージ、朝鮮戦争と続く社会情勢の中で、急速に政治色を強め、大学側と衝突を繰り返すようになるのである。



服部峻治郎学長と学内の各種団体との懇談(1951年9月)。右から生協・女子学生・同学会・看護婦見習の各代表、服部学長、学生健康保険組合代表、学園新聞代表。(4-55)

預書の通り懲戒処分する

貳拾伍年十一月十一日

京都大學

[illegible]

貴 貴 貴 貴 貴 貴 貴 貴 貴 貴 貴 貴 貴 貴 學 學 學 學 學 學 學 學 學 學

魚 無 魚 無 魚 無 魚 無 魚 無 魚 無  
頭 期 州 期 朋 匪 期 婦 期 期 期 期

[illegible]

告示第十四号

11月8日全京都学生総ケツキ大会  
全学デモで結集しよう

平和と自由を愛する全米が、説教！

民間各企業に於てはすでに競争行なわれ、いよいよ序園に到しても十中百断行つれることは必至だ

京都の勞作者は

すでに各工場に表れたレッドパージに對し、激甚拒否をもつて、斗争の鋭化に島津、森、三洋油脂等に於ける斗争は、今迄にない力強い力量を發揮してゐる。そして、この斗争を土台に十一月十日政友会改選を定め、十一月七日、山口シア革奮闘記念日に、山口音楽堂に於て、人民大会を將つ

十一月八日

決勝的段階は来た

かゝる状態に立つて同学生会中選出は京都府及全京師の各校に押し十一月八日全京師学生総ツキ大会を開くべく相共に奮起する機嫌ひがけることを決定し

金堂前日、直ちに各学師教室毎に十一月の大公に於て園め決定し

十一月八日めざし遊にスト、デモの取組むこと、のえや

決断しわれが奮闘したるこのエネルギーを結果して、十一月八日全生

◎ レッドパーシを実力で粉砕するため

◎京大反戦自由の伝統を守るために！

十月三十日

子会

学生処分を伝える告示第14号。1950年11月、前進座事件(註1)によって大量32人の学生が放学・停学・譴責の処分を受けた。(4-57)

レッドパーシへの対抗を呼びかける同学会のピラ。(4-58)

(註1) 演劇部・文学部同好会主催の「前進座と語る会」をめぐって警察と学生とが対立、学生は大学当局不許可のまま集会を強行し、川端署へデモを行い5人が検挙された。





総合原爆展会場。多くの入場者の中に説明する学生の姿も見える。(4-59)



総合原爆展の展示パネル製作風景。(4-60)

1951(昭和26)年、京大の学生に  
関係して、社会的に注目を集めた  
二つの出来事があった。一つは、7  
月14日から24日まで京都駅前丸  
物百貨店(現:近鉄百貨店)で開催さ  
れた総合原爆展であり、もう一つ  
は11月12日のいわゆる天皇事件で  
ある。

総合原爆展は同学会の主催だったが、活動家とされる学生だけでなく各学部多くの学生が自らの専門を生かして200枚近い展示パネル作成に参加した。敗戦による解放感も束の間、朝鮮戦争勃発という現実のなかで、学生たちが抱いた危機感が広範な参加の原動力だったと当時の人々は語っている。入場者は3万人に及んだといわれ、占領下の日本で原爆被害の実相を広く人々に伝える最初の試みとなった。

11月12日、関西地方巡幸の一環として昭和天皇が京大に来学した。正門付近に集まっていた学生たちによって一行の到着とともに車を遠巻きにして「平和の歌」が歌われ、天皇・天皇制批判の看板やプラカード、公開質問状が用意されるなど、他の巡幸では例を見ない光景が現出した。学生たちは一行を妨害したわけではなく、逮捕者も出なかったが、新聞などは激しく京大を非難し、大学当局も同学会の解散および委員長以下8人の学生の処分を発表した。

その後、1950年代前半の京大では、破壊活動防止法反対運動や全学連の下での学園復興闘争などが展開され、荒神橋事件(註1)や記念祭事件(註2)が起きるなど、動揺が続いた。



火の球はどの様に成長するか？

原子爆弾の閃光に放出するエネルギーが莫大なので、最初の瞬間閃光の輝は非常に高温となり、爆風がはいるのが一瞬に急遽下りくれば、同時に表面の温度はたちまち下り、秒単位に二千度になる。それから再び温度は上り、0.3秒後に七千五百度にまで上つてから、ゆるやかに冷却し、十秒後にほぼ常温となる。其の間閃光の輝は強烈な光を地上にふりそそぎ、ありとあらゆるものを焼くことがした。

火の玉はどのように成長するか

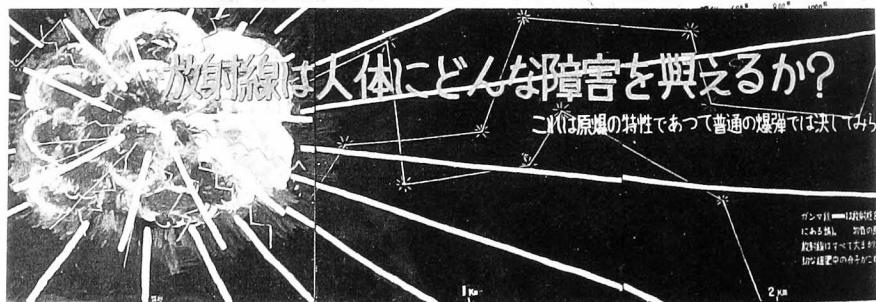


ガンマ線と中性子は原子病をおこす

α線より透過力の強いγ線である。核分裂後の状態にた  
まなつて出る。人体に原因病をおこす主な原因である。相対  
質量一位の陽子と同等に質量と共に急速に運動するが約数分  
危険がつかつく。

中性子(核分裂の際発生)同時に中性子といふ粒子があらわし  
い速さで飛び出る。しかし空気の窒素酸素の原子核との衝突  
で速さがふりふり大部分減速して速さになつて約一秒後に地上に  
達する。原子病の二大原因である。

中継子はどこか  
ってでくる。  
(横山)より(国)



爆 心

1KM以内で生き残つたとすれば  
せいは奇跡だや爆風で死  
さける事が出来ても放射線  
ぬ釜である 此処では厚さ30cm  
のコンクリートでも放射線は貫  
通してしまうのだから



### 急性型

彼女は下駄倉庫の前でトラツクの荷組みを監督している時、頭から火を浴びた處じと并に大蛇に叩きつけられ血に塗れてしまった。気が付いた時は肺、首、手一面のやけどで下衣もモンモンふつとんでいた。三日后よりはいたり下りたり、嘔吐、下痢、始め約39℃以上の高熱にうちやけ、皮膚も為に赤熱だとなつた。尚くぐさや皮下には血が滲み出、便にも血がでていた。一週間たつてくしけするも血が黄になつておち始めたとき、たゞ彼女女は死んでゐた。



## 要 急 性

空襲解除になつて門口をまたいで前庭 山田君は  
ばさり 落ちて来た梁の下敷になつた 脚で  
と云ふ程を目にしながら下敷に投げ出た はし  
退屈は何ともないのが流石に付合なくと手づつてい  
つそれが強烈に感ぜられて腹もなく毛がばらばら  
し そのまゝ病室についてしまつた 血尿や鼻血  
出血は勿論のこと 体表表面はおてきてふさがれた  
なり 肛門からはうみが三合も出た 彼は四重目  
だ

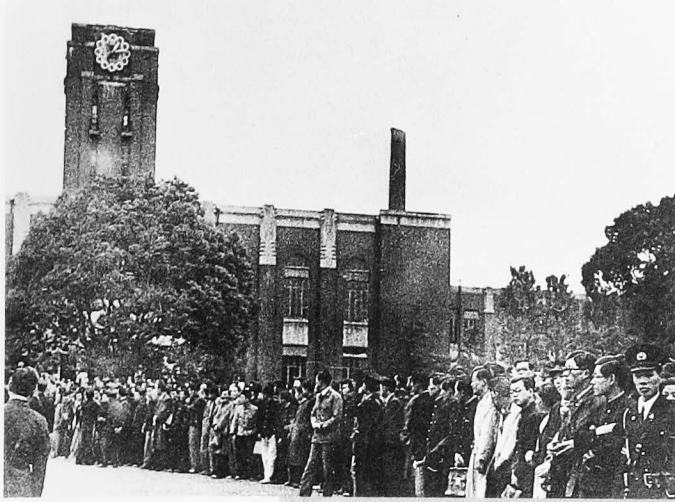


総合原爆展入場券。写真の券は、当初作成したものが売り切れて増刷したもの。(4-62)

(註1) 1953年11月、「わだつみの像」歓迎に向かう学生の集団と、これを不法デモとする警官隊が荒神橋の上でもみ合いとなり学生十数人が河原に転落、負傷した事件。

(註2) 1955年6月、創立記念祭の開催方法をめぐって大学側と同学会が対立、一部学生が滝川幸辰総長を拘束するに至り2人の学生が逮捕された事件。「第二次滝川事件」ともいう。





昭和天皇への公開質問状。  
(4-65)

## 公開質問状

私達は一人の人間として貴方を見る時、同情に耐え兼ね。例えば廊下を歩きながら、その白い壁の裏側には法廷のひびかれた壁ではされない。貴方の行路は数回聞かぬから、何時何分どこ、それとさつちり定められていて、貴方は何らの自主性もなく、定まった道を通らねばなりません。

貴方は一種の機械的人間であり、民衆支配のために自己の人間性を失っています。私達は貴方のことを人間として、その宮殿の外で多くの叫びをあげよう。死んでいくことを知ろうともしない。

じように歩きながら、私達は貴方に同情している。これは、貴方たことを考えるとき、私達は貴方に人間性があることを認める。貴方は今も生きています。名前だけは人間天皇であるけれども、その備のデモンストラーションにすぎないことを私達は考える。貴方が備の日本であつて同じやうな戦争イデオロギーの一つの支柱として、いけることを認めるを得ないのです。我々は勿論かつての貴方いけれど、それよりも、なにより貴方が同じやうなことを繰り返さない。そのために私達は貴方が退位され、天皇制が廃止されることを望む。身それ望まれぬとしても、一人の人間として憲法によつて人間連の叫びに耳をかたひけ、私たちの質問に人間として答えてくれるのです。

### 質問

- 一、もし日本が戦争に巻き込まれ、その事態が起るならばかつて終世に平和の道を開く事を宣言された貴方は個人としてどうするか。
  - 二、貴方は日本に再軍備を強要される様な事態が起つた時、憲法に於いて日本國の天皇としてこれを拒否する様子がかけられる用意が、貴方の行幸を理由として京都では多くの自由の制限が行われ、市民に多大の被害を及ぼすのでないか。
  - 三、貴方は民衆の希望を望むのでないか。
  - 四、貴方が京大に在りて最も必要なことは教授の進捗ではなくて、学生へ會つて話し合つていこうと思ふことではないか。
  - 五、廣島、長崎の原爆は貴方が終戦の詔書で強要された。貴方は全同様に、それを世界に徹底させるために原爆を制御するか。又私達はよく貴方にそれを見ていた。貴方はそれを見るでしようか。
- 私達は、まだ日本において貴方の持つ影響力が大である。これを個人として、努力されることに希望をたて、平和な世界の象徴である、世界の平和について何らの意見も持たない方であると思はれます。私達は貴方がこれらの質問によせられます。

天皇 裕仁 殿

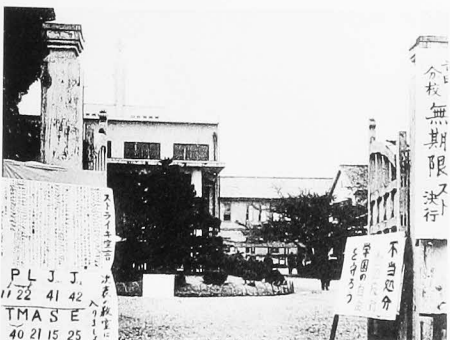
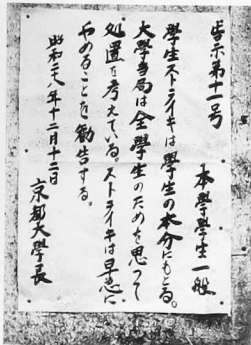
京都大學同學會

昭和二十六年十一月十二日

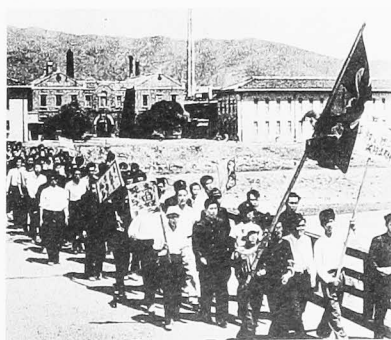


昭和天皇を東一条通で迎える人々。(4-67)

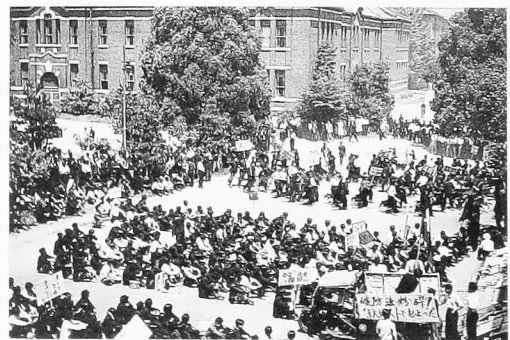
学生のストライキ中止を勧告する告示。(4-66)



ストライキ決行中の吉田分校正門。(4-68)



荒神橋をデモ行進する学生。(4-69)



破壊活動防止法に反対する学内集会。(4-70)

# 新制発足期のキャンパスへ1

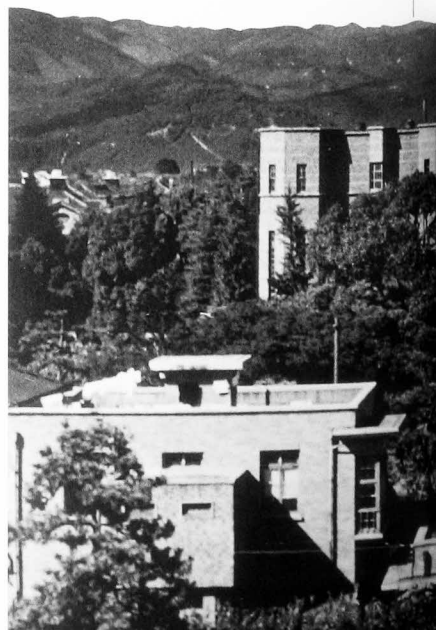
戦争末期の空襲で全国の大学キャンパスが甚大な被害を受けていたなか、幸運にも京大は施設・建物が無傷なまま敗戦を迎えた。しかし戦時中の予算不足から保全管理は決して十分とはいえず、折からの食糧難もあってキャンパスのあちこちに畑が作られるなど、学問研究にふさわしいとは言いかねる環境であった。戦後も財政状況の逼迫は続き、今度は戦災を受けなかったがために建物の新築予算がなかなか獲得できない状態が続いた。象徴的だったのは本部構内の附属図書館で、1940（昭和15）年に新館建設に着工したが戦争のため外郭工事が済んだ段階で放置されていた。戦後、学内外の資材をかき集めながらようやく1948年2月に竣工を見たのである。

当時の西部構内には学生の福利厚生施設が集中していたが、1947年12月に学生食堂から出火、武道場を除いてほぼ全焼した。学生生活の困窮が深刻だった時期だけに諸施設の再建が急がれ、1949年には規模縮小されながらもとりあえず完成した。翌50年には旧武道場が改築され西部講堂となり、続いて西部食堂の増築や講堂の改装など構内の整備が進んだ。当時構内中央には瀟灑な池があって学生の憩いの場となっていたほか、現在の体育館のあたりには工学部の2階建て木造校舎がコの字型に作られ、その西側にはテニスコートが4面あるなど今日の姿とは全く違う様相を見せていたのである。

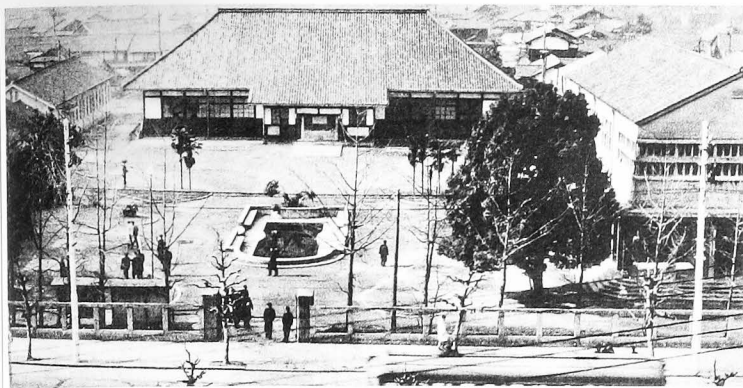
1946年10月2日撮影の本部および西部構内の航空写真。西部構内には工学部のコの字型木造校舎と、その南隣に焼失以前の建物がH字型に見られる。東大路通や今出川通に等間隔に植えられた街路樹が印象的である。（4-71）



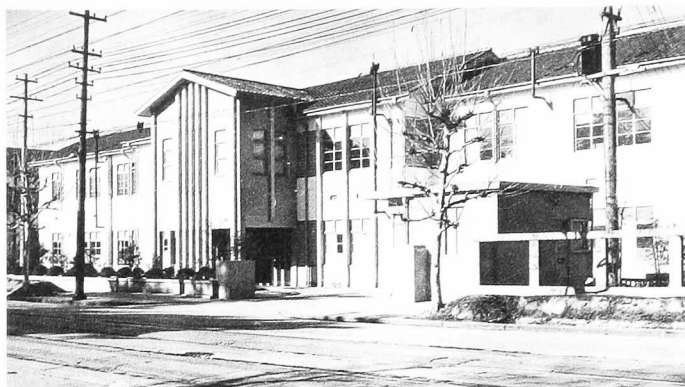
2代目の附属図書館正面（1948年竣工、大倉三郎・内藤資忠設計）。建物北東角の正面入口。向かいあった文学部陳列館との間の広場は学生の集会場所となっていた。入口の石段は敗戦直後構内のあちこちから学生や教職員が自ら拾い集めた石で作ったものである。（4-72）



1954年頃の本部構内。時計台の右側に立つボイラー用煙突が取壊され、法経本館の東翼の建設が始まっている。（4-73）



西部構内。門、池、講堂が一直線に並び、幾何学的なデザインが感じられる空間であった。(4-74)



工学部旧繊維化学および化学機械学教室。西部構内北地区、現在の総合体育館の場所にあった木造2階建てのコの字型校舎。写真は東大路通に面した風景。(4-75)

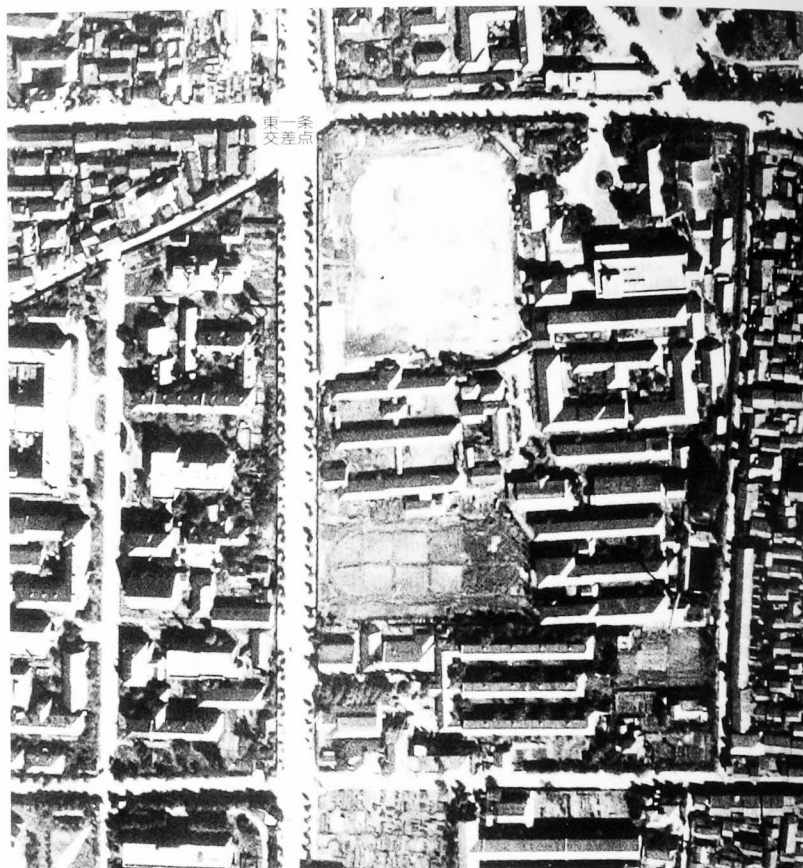


西部食堂前の行列。西部構内の南端にあった西部食堂は焼失後規模を縮小して再建されたので、昼食時には長蛇の列ができていた。(4-76)





1946年10月2日撮影の第三高等学校構内の航空写真(写真4-71と一連のもの)。(4-77)

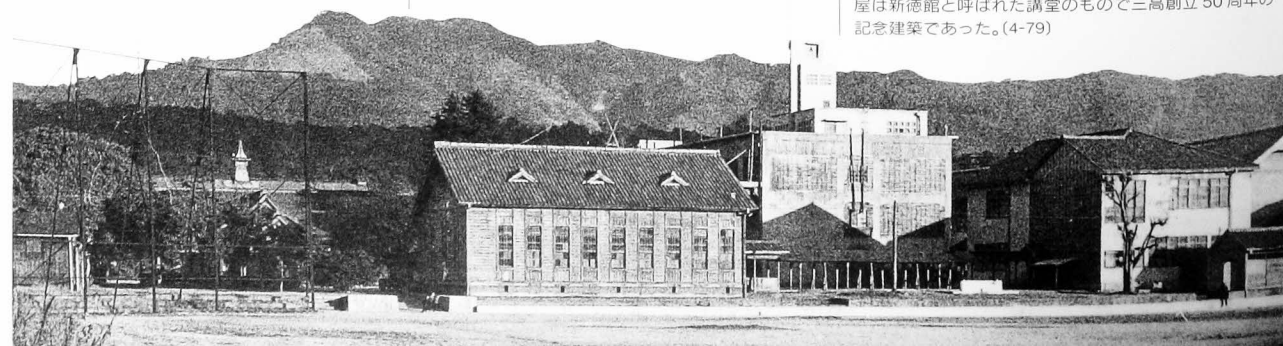


吉田分校前庭。現総合人間学部A号館前。左側の切妻屋根の車寄が見える和風建築は尚賢館。A号館もまた西側部分が増築されていない。(4-78)



イナ大学のようなキャンパスをつくる遠大な計画をもっていたともいわれる。結果的には実現しなかったが、このような時期に大学キャンパスの整備を長い目で考えていたことは注目すべきことではなかろうか。

吉田分校グラウンドから見る校舎群。A号館以外は現存しない。当時の吉田構内の建築は大部分が木造であった。正面の木造建築は大教室、その左側に見える特徴的な塔屋は新徳館と呼ばれた講堂のもので三高創立50周年の記念建築であった。(4-79)



新制移行に伴う第三高等学校との合同により、三高構内が新たに京大キャンパスに編入された。本部構内とは東一条通をはさんで隣接するため、その敷地利用については当時複数の案があったが、最終的には2回生を収容する吉田分校という形で使用されることになった。しかし建物や施設はそのまま転用したので、外観上の変化は殆どなかった。その中で吉田グラウンドはキャンパス全体の中心に位置するためか、創立記念祭の園遊会や運動会など、大学の主要行事の会場として農学部グラウンド以上に使用されるようになっていった。

現在の宇治構内である旧陸軍火薬廠跡もこの時期に京大の敷地となった。1950(昭和25)年から1回生を収容する宇治分校が置かれたが、これは鳥養総長の意見で、一般教育は学部から離し旧制高校的雰囲気の中で過ごさせるという方針によるものだった。しかし開校当初は「ジャングル大学」の異名をとるほど施設・衛生面では劣悪な環境で、本部との連絡も悪く教職員や学生の不満もかなり強かったらしい。木造の教室群が急遽建てられたが、最終的なプランの完成を見ずに1961年宇治分校は廃止された。

鳥養総長は隣接する自衛隊駐屯地も編入して、米国ノースカロ

## 新制発足期のキャンパスへ2

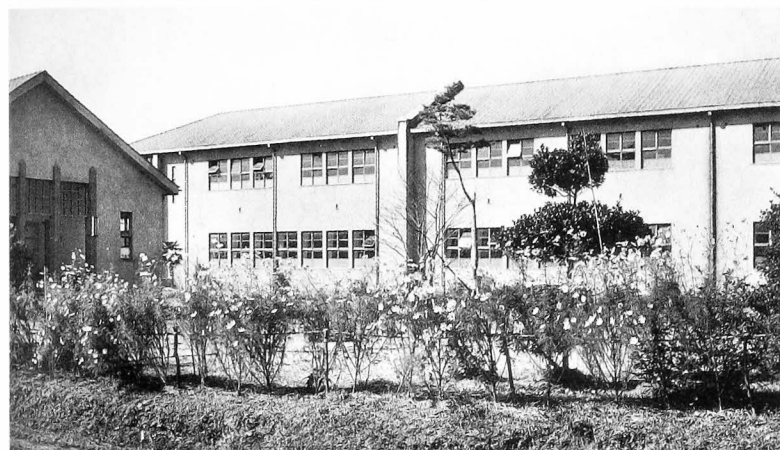
◎ 1945～1968



宇治構内の廃屋。陸軍火薬廠時代の施設の残骸と思われる。学生の屋内バドミントン場として利用されていた。(4-80)



宇治構内の沼地。低湿地だった構内にはいくつかの沼があり、陸軍時代のもと思われる廃材が沈んでいた。開校当初はボウフラが大量にわいたという。(4-81)



宇治分校校舎。開校当初は旧陸軍施設を改築するなど教室不足をしのいでいたが、約1年間で木造ではあるがとりあえずの施設整備を行った。(4-82)



宇治分校北門。(4-83)

宇治分校構内道路沿いの風景。右側は大講義室。(4-84)



# 敗戦直後の学生生活と京都の街

大学の戦後はカーキ色の軍服の群から始まった。復学者の多くは払い下げの軍靴軍服を着用して学園に戻ってきたのである。彼らは一刻も早い講義の再開を熱望していたが、衣食住や学資の確保は大変困難で、大部分の学生はアルバイト探しに奔走した。特に敗戦直後の2、3年は肉体労働から古本屋経営まで多種多様の「角帽」のアルバイトが世間を賑わせた。業種によっては批判もあったが、工学部の学生が京都市の復興計画に協力したり、水道復旧工事の労働力となったりと、学生が京都の街や人々とそれまでにない関係を持ちえた時期であった。一方学内でも、あらゆる物資の不足に学問研究そのものが中断を余儀なくされる状況が続いた。食糧難による夏季休暇の繰り上げ実施に始まり、学用品はもちろん、理科系では実験材料や電力・水道水の不足に悩まされた。学内が結束して様々な自衛手段を講じ、かろうじてこの時期を乗り切ったのだが、その一方少なからぬ学生が生活困窮のため学業を断念せざるをえなかった。

局地的に爆撃を受けたとはいえ、建物疎開の爪痕を除けば京都の街は概ね戦前の景観を保っていた。しかし物資の欠乏は都市部の例にもれず深刻で、あちこちにヤミ市が立つ状況であった。そうした中で占領軍の進駐は街に新たな表情をもたらした。英字看板が増え、彼らが伝統的な街並みに奇妙なコントラストを見せていたのである。

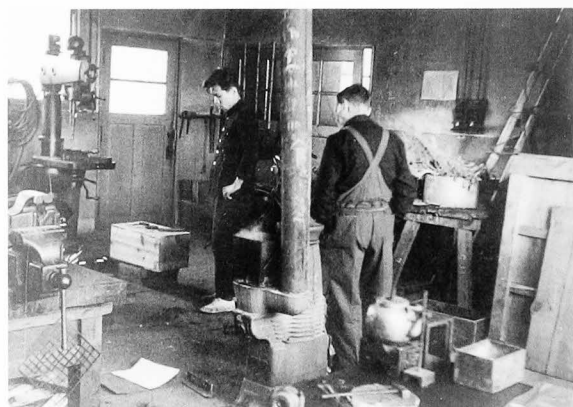
街も人々も学生も生活苦に喘いだ時期ではあるが、彼らの表情には敗戦のもたらした解放感と明るさが感じられはしないだろうか。



学生のアルバイト風景。左は京都駅の立ち売りを報じる新聞記事（『京都新聞』1946年6月26日付）。下は宝くじを売る学生たち。かつて学生のアルバイトがこれほどいろいろな職種でみられたことはなかった。特にアイスキャンディー売りには滝川教授に代表される批判的な見方や、逆に同情論もでるなど話題となった。（4-85-86）



工学部化学機械学教室の実験室。物資や予算の不足を反映してか古びて雑然としている。この時期実験系の教室はどこも実験材料の確保に追われていた。（4-87）



農学部本館屋上での学生のスナップ、角帽・詰襟だが履いているのは払い下げと思われる軍靴である。（4-88）



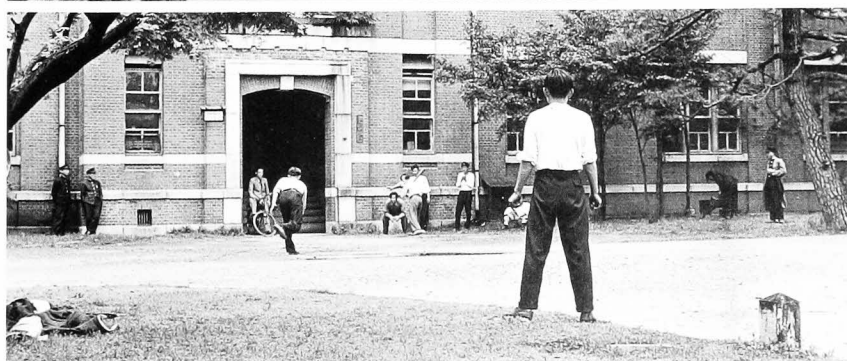


蛸薬師通河原町西入のヤミ市風景(1946年)。(4-90)

四条木屋町角の不二家喫茶店前(1949年ごろ)。現在も同所にある不二家は当時接収を受けて占領軍専用の店となっていた。英字看板の下を歩く占領軍兵士はこの時期に特徴的な風景である。(4-89)



平安神宮大鳥居前に連なる占領軍。1945年9月25日の京都進駐以降、京都の街のあちこちでこのような光景が見られた。(4-91)



土木工学教室本館前での野球風景。この頃から野球が学内でも盛んになり、グラウンドだけでなく構内のちょっとしたスペースで、試合やキャッチボールをする姿が見られた。研究室対抗の野球大会も頻繁に行われた。(4-92)



琵琶湖でヨットに乗る学生。高級レジャーの代表であるヨットだが、当時は学生でも楽しめた。(4-93)



た学生生活が存在したらしい。1950(昭和25)年に開校してから約10年で廃止となった宇治分校だが、今なお当時を懐かしんで宇治構内を訪れる卒業生もいる。

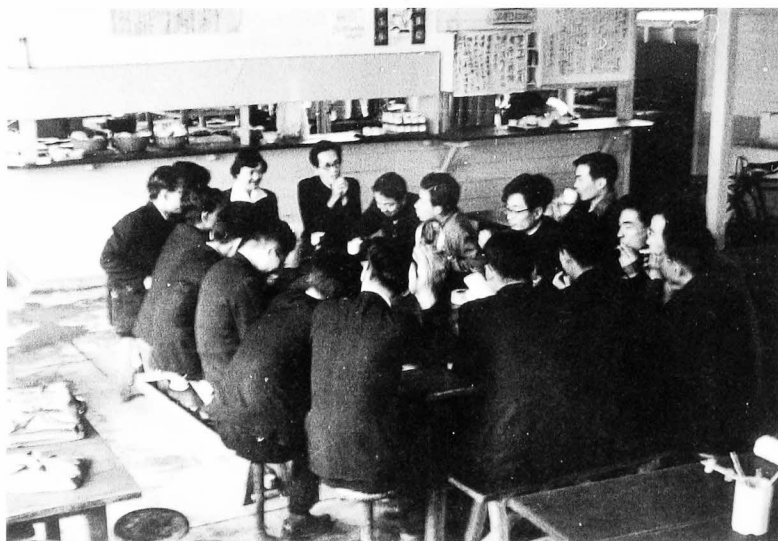


パチンコに興じる学生たち。(4-94)



スキー装備の学生たち。スキーをするときでも角帽を被りつづけているのが時代を感じさせる。(4-95)

女子学生を囲んでの討論会。「女性職業論」について討論が行われた。北部食堂にて。(4-96)



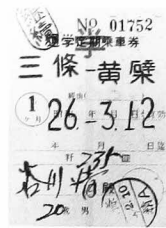
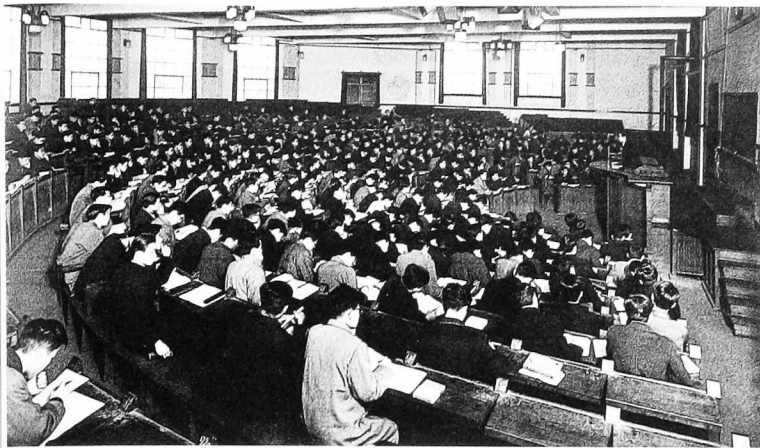
女子学生求人ビラ。住み込み家庭教師とあるからバイト付下宿の募集と思われる。女子学生の下宿事情は男子以上に厳しく、「女子学生懇談会」という女子学生の親睦組織を中心に女子寮の建設などを大学側に要求していた。(4-97)



## 新制発足期の学生生活

敗戦期の混乱が一段落して新制大学が発足する頃になると、世の中も少しずつではあるが落ち着きを取り戻し始めていた。学生生活も、苦しいながら一時期のように肉体労働をしてまで生活費を捻出するという状態からは脱し、小規模ではあるが近郊へのグループ旅行や海水浴、スキー、ヨットなどのレジャーを楽しむゆとりも生まれている。まだまだ少数ながら女子学生も大学生活に溶け込みつつあったようだ。

分校制度により1、2回生はそれぞれ宇治分校・吉田分校へ配属されたが、地理的に本部から隔離された宇治分校では特色ある学生生活が送られていた。前述のように施設面での整備が遅れ、本部に比べて不満の多い環境であったが、それだけに学生同士の団結は強かったようだ。自治会活動を中心に独自の文化祭を開催して宇治市民にも公開するなど、縦割りの学部枠を越えて横の一体感を持っ

[illegible]

お知らせ 宇治分校自治会

諸君の合格を心がらお祈りすると共に、今般一戸の御健斗を祈りつゝ、左記の稿件につき誠にお伝えします。

一、下宿のあつてせんについて

諸君が入学されて才一年目を送られるのは、中治分校ですが、遠方の諸君が宇治一年間、地とされる下宿について、諸君が何々刑々に振されるのは、何かと不便の事が多いと思ひますので、自治会では下宿引取り委員会を中心に下宿あつてせんをする事を計画しております。精製利用下さい。

日及び場所

三月三十一日(火) 身体検査の日 同計台下附近

三月二十三日(日) 一日十八日 中治分校自治会ボックス

向あつてせんを申し立てる事、お申し込みとして二十円申受けます。

二、自治会賛助会について

諸君が入れられてから、自治会を脱会している／＼と認識される事と思ひますが、その際、活動資金として自治会費一年分(百円)を納入する事が規約で定められてあります。その内、期分五十四を履着指導の日又は寛政三の日に納めていたとしたいと思ひます。

一／＼と経費の高々時ではあります。が、学生の自治活動の重要は、意、特に御力で御協力をお願ひします。

三、歓迎会について

合致された諸君は、受験生時代の並しけを経て現在いる／＼と希望に燃えておられる事と思ひます。故、自治会では同窓会とタイアップして、諸君の御入学を祝ひ、今後の御健斗を祈る意味で、歓迎会を催したいと考へております。

一人でも多く参加される事を、お奨めしております。

向その他、お問い合わせは左記へお願いいたします。

京都市左京区吉田本町京都都大吉田分校自治会



# 高度経済成長期のキャンパス

好況に沸く産業界から教育界への要望は、技術革新に不可欠な科学技術者の養成であった。文部省はこれに対応して「科学技術者養成拡充計画」を1957(昭和32)年に策定し、次いで増加する理工系学生を収容するために「国立大学緊急整備五カ年計画」を1960年から実施した。この計画は、京大キャンパスの景観に戦後初の大きな変貌をもたらした。

学生増加率の最も大きかった本部構内の工学部では、学部歴史を伝える煉瓦造りの建物などを残しつつも、新たに1～7号館が次々と建設された。これらはすべて地下1階地上4階建てで、柱梁構成のコンクリート打ち放し仕上げという同一スタイルを採用している。その結果、従来2階建てが主流であった本部構内はこの時期一挙に高層化が進み、ここに現在のキャンパスの原型が形造られることになった。

ほぼ同時期に大きな変化が見られたのは、旧三高の教養部構内である。1961年に宇治分校が吉田分校に統合され教養部が一本化したのを契機に、京大に引き継がれて以来初の本格的な増改築が行われた。A号館の西半分の増築に始まりD・E・F号館の新築、A号館東西両棟の建設といずれも鉄筋コンクリート造り3、4階建てで、木造校舎が大半を占めていた構内風景は一気に様相を変えていった。

高度経済成長期のキャンパスの整備には、それまで個々の建物が個性的外観を競っていたのとは対照的に、建物の機能性を重視し全体の統一感を追求する方向性が強く感じ取れる。



工学部4号館(1968年竣工、増田友也設計)。この時期に建てられた工学部の校舎は、ほとんどこのスタイルに統一されている。(4-106)



工学部土木工学教室付近の航空写真。工学部の化学・土木・建築の各教室は本館の北側を囲むように増築された。この時期に、今出川通に面して四角い窓が続く現在の景観が生まれた。(4-107)





本部構内の航空写真(1971年撮影)。本部構内の東側や教養部構内に鉄筋コンクリート造りの新築校舎が多数見られる。  
(4-105)



西側増築中の教養部A号館(1958年)。(4-108)

D号館とその南側に残る旧三高寄宿舍(自由寮)の煙突(1961年ごろ)。煙突の左側にはプールがあり利用者の姿が見える。この後間もなく煙突もプールもE号館建設のために取り壊された。  
(4-109)



本部時計台から見た教養部構内。鉄筋コンクリート造りの箱形の建築が増え、構内の景観が変貌しつつある。  
(4-110)



# 学部・研究所等の新設



竣工当時の薬学部本館(1966年)。1958年に京都織物会社から購入した土地が薬学部用地にあてられた。(4-111・112)



11月祭での薬学部の展示会場(1962年)。1962年12月に焼失した医学部構内の旧本館にて。(4-113)

薬学部の歴史は1939(昭和14)年の医学部薬学科の設置に始まる。1960年の学部昇格は、戦後の目ざましい薬学の進展や医薬品業界の成長に後押しされたものであった。これを機に、不十分だった諸施設の拡充や、時代の要請に基づく講座の改変が行われ、薬学を総合科学として研究する体制づくりが進められた。

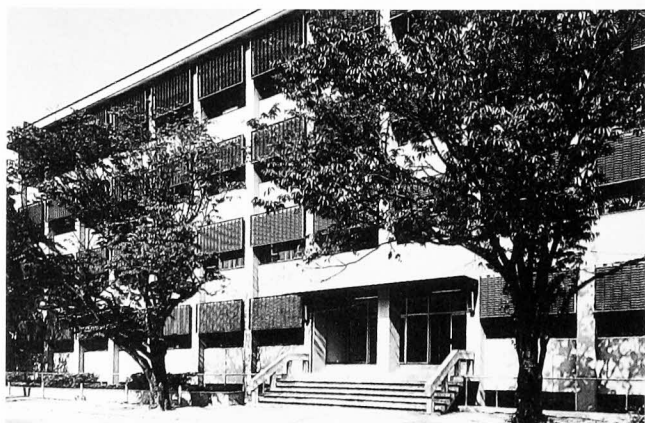
この時期には戦後抑制されていた研究所の新設が、経済の回復や学問の進展に促されて相次いで実現した。京大でも、戦後最も緊急を要する研究分野とされたウイルスの研究のため、ウイルス研究所が1956年に設立されたのを皮切りに、62年には高度成長の波に乗る産業界の要望をうけて経済研究所が、翌63年には数理科学の産業技術部門への応用に関する研究を目的に数理解析研究所がそれぞれ設立された。また63年設立の原子炉実験所は、サンフランシスコ平和条約締結後に解禁された原子力研究推進のために計画されたが、その安全性への理解がなかなか得られず、敷地選定は難航した。1965年には東南アジア研究センターが、

東南アジア地域の総合的組織的研究を目的に設立されたが、設立時のフォード財団の資金援助に学内の一部から反対運動がおこった。続く66年には総合的な学内の保健管理を行う機関として保健管理センターが、67年には戦後の野生ザル研究の成果の上に霊長類研究所が相次いで設立された。なお1961～69年の間、高等学校工業科教員の養成を目的に、修業年限3年の国立工業教員養成所が京大に附置されていた。

ウイルス研究所。発足後11年目によってやく専用の建物が病院西構内に竣工した。(4-114)



経済研究所。本部構内に1965年竣工。当時は3階建てだった。全国共同利用研究所。(4-115)



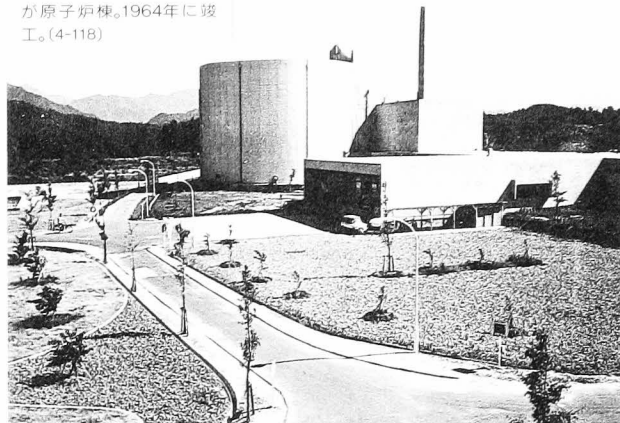
数理解析研究所。北部構内の植物園に隣接して1968年竣工。全国共同利用研究所。(4-116)



原子炉実験所建設現場を視察する平沢興総長(1962年)。難航した敷地は1960年に大阪府泉南郡熊取町に決定された。(4-117)



原子炉実験所。円筒の建物が原子炉棟。1964年に竣工。(4-118)



保健管理センター。本部正門の西隣にあり、保健診療所と共に全学の保健管理に当たっている。(4-119)



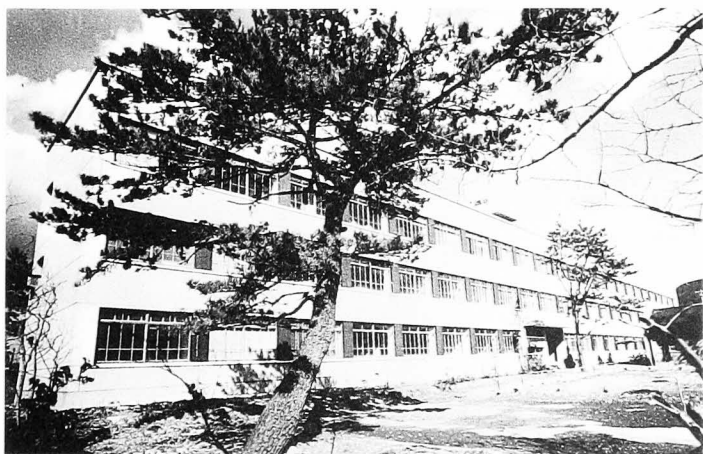
霊長類研究所本館とサル類放飼実験場。愛知県大山市にある。全国共同利用研究所。(4-120)



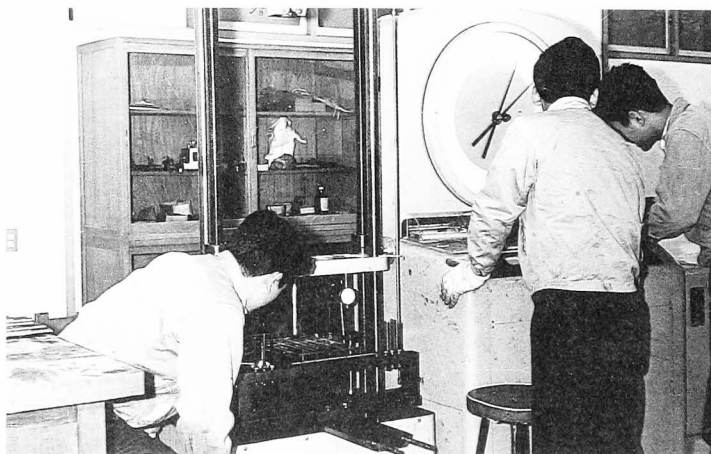
東南アジア研究センター設置当時の建物。吉田下阿達町にあった木造2階建てで、ここには他にもいくつかの新設研究所が独自の建物を持つまで仮寓していた。(4-121)



旧京都織物会社本館。1889年竣工の煉瓦造りの建物。1971年から東南アジア研究センターが使用している。(4-122)



工業教員養成所。宇治橋内に建設された。(4-123)



工業教員養成所の実験風景。(4-124)



# 60年安保とその前後の学生運動



メーデーに市内をデモ行進する学生。学生生活に根ざしたスローガンのプラカードが目立つ。(4-125)



メーデーで掲げられる河上肇の肖像画。行進しているのはかつて河上が教授であった経済学部の学生。(4-126)

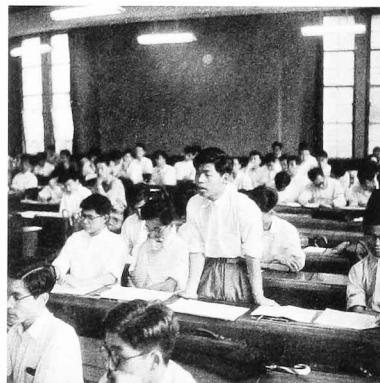
戦後復活したメーデーに戦前と異なった趣を与えたものの一つは、整然とデモ行進をする学生群の参加であった。京大の学生も、労働者団体とは一味違ったスローガンのプラカードを掲げて京都市内を行進したが、当初沿道の市民からは「学生さんまでが…」という驚きの声が上がっていたという。その後学生のメーデー参加は半ば恒例行事として60年代まで続き、その間にメーデーのみならず学生が都大路をデモ行進で練り歩く姿は、沿道の市民にとって珍しい光景ではなくなっていった。

1946(昭和21)年1月に死去した河上肇の追悼講演会から出発した「河上祭」は、「河上精神の継承と発展」をスローガンに開催され、50年代60年代を通じて学内外の関心を集める行事であり続けた。会場に必ず掲げられていた河上の肖像画がメーデーの行進でも掲げられるなど、河上肇はこの時期、学生運動のシンボリック存在だったようである。

60年安保は戦後の広範な国民運動の集約点であったと同時に、大学においても各構成員が一致団結した最大の運動であった。京大では各学部自治会を中心に、まずクラス討議や集会がもたれ、その上でストライキやデモなど学外との統一行動がとられていった。また教官の中にも積極的に反対表明や政府批判をする動きが出てきた。こうした流れは5月26日の教員・職員・学生から約3,000人の参加者を集めた創立以来初の全学大会へと集約されていく。この大会では国会解散要求を含む大会宣言が決議されるという、独自の反対表明の方式がとられ注目された。



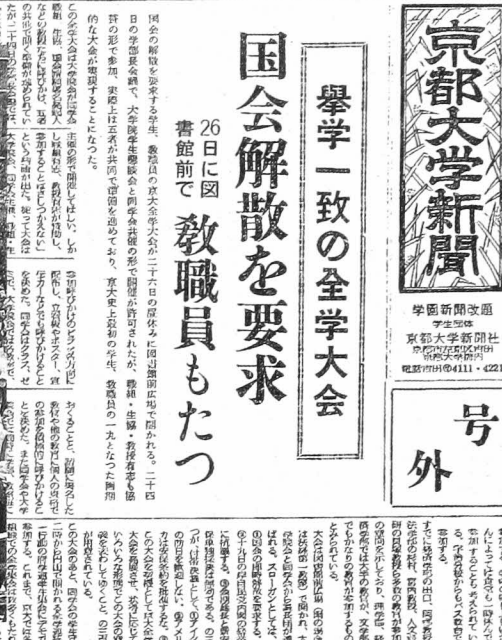
経済学部の学生大会(1957年ごろ)。(4-128)



第8回河上祭講演会の演壇。河上肇の肖像画が掲げられている。(4-127)



同学会再建記念祭。記念祭事件で2度目の解散をさせられていた同学会は1959年に再建された。(4-129)

[illegible]

A black and white photograph of the entrance to Keio University. On the left is a traditional Japanese building with a tiled roof. In the center is a large stone gate. To the right is a modern building. Several vertical signs are visible, including one that reads 'Keio University' and another that reads 'Keio University Entrance'.



# 高度経済成長期の学生生活

高度経済成長期は、家庭電化製品の普及やモータリゼーションの到来に代表される生活様式の革新的変化が、人々の価値感をも大きく変化させた時代であった。大学においては、好景気による大学進学率の上昇と理工系学部の学生増募政策とが相まって、いわゆる「大学のマンモス化」が本格的に始まった時期である。しかしながら下宿生を中心とした学生の日常生活には、一般家庭のような急激な変化はみられず、いわゆる三種の神器もここでは電気ポット・電気コンロ・トースターを指すものであったらしい。モータリゼーションの到来も学生生活にはまだまだ無縁で、構内に見られる自動車の数もごくわずかである。

この時期の学内の雰囲気象徴的に語るものとして、創立記念祭の園遊会や運動会、文化祭(1953年から11月祭に改称)の光景が残されている。特に、現在では行われなくなってしまった園遊会や運動会では、総長や学生部長が学生たちと身近に接していたらしく、戦前の帝国大学時代とも、これ以降の時代とも違う教官と学生の間を垣間見ることができる。また文化祭の企画には、経済的には発展の時代にありながらも、その発展が抱える矛盾や社会的問題に敏感に反応する学生の姿がある。



園遊会での学生と総長・学生部長。和気あいあいとしたふれあいの光景は園遊会の名物であった。向かって右は平沢興総長、左は芦田譲治学生部長。(4-135)

創立記念祭園遊会会場入口。園遊会は学内の親睦会であり、入口では職員証・学生証の提示が求められた。(4-136)



教職員による煙草の火付け競走。運動会には教職員参加種目も用意されていた。(4-137)



運動会での綱引き。運動会は学部対抗形式で行われ、各学部はアルファベットの略称を染めた旗を振って応援した。(4-138)







1960年代の11月祭仮装行列。国内外の社会政治状況や学内の雰囲気などを反映している。(4-139-140-141)



11月祭のファイアストーム。会場は西部構内。(4-143)



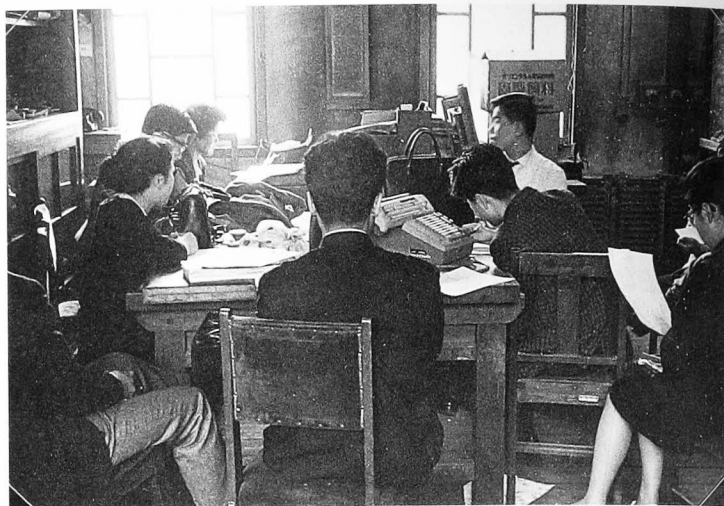
ガガーリン少佐の歓迎集会。1962年5月25日、世界初の宇宙飛行士となったソ連のガガーリン少佐が京大に来学。法経第1教室をぎっしりと埋めた学生たちから熱烈な歓迎を受けた。(4-144)

11月祭の記録ノートとパンフレット類。ノートは実行委員会のもの。活動を記録する写真の貼り付けも多い。演劇コンクールは1950年代60年代を通じて文化祭のメインイベントの一つであった。(4-142)

◎ 1945～1968

## 高度経済成長期の学生生活

文学部心理学研究室。最後まで残っていた木造校舎の一室。(4-145)



農学部農林経済学科の農村調査。オート三輪で農村をまわった。(4-146)



図書室での学習会。(4-147)

フォークダンスの様子。ようやく男女共学の雰囲気根付いてきた。(4-148)



1965年頃の百万遍交差点風景。(4-149)





試験用の講義ノートに殺到する学生たち。今も変わらぬ光景。(4-150)

下宿で本を読む学生。高度経済成長の波もここまでは及んでいない。(4-153)

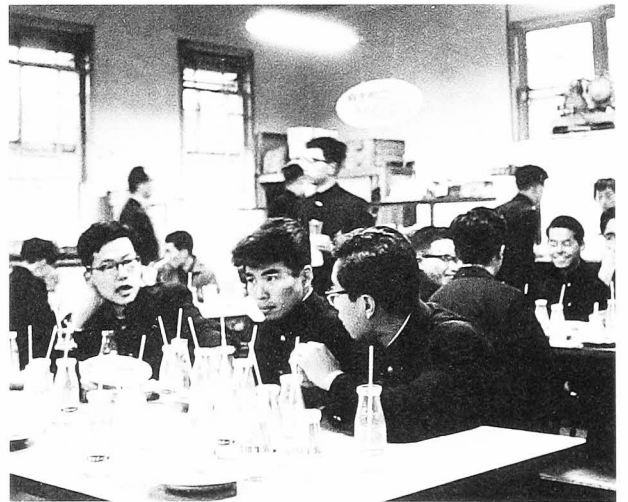


リヤカーでの引越。モータリゼーションにはまだ程遠い。(4-154)



葵祭りのアルバイト学生。当時5月になると市内各地の祭礼行列に京大生はひっぱりだこで、のべ2,000人が参加した年もあった。(4-151)

西部食堂パンショップ付近(1959年)。牛乳も販売していたが卓上はいつも空きビンが林立する状態。(4-155)



たらいと洗濯板での洗濯(1955年)。(4-152)



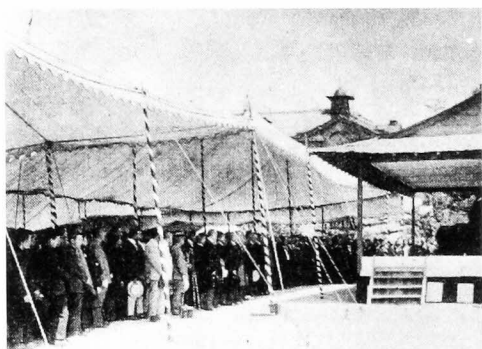
中央購買部。法経本館西翼の地下にあった(1965年ごろ)。(4-156)





## 創立記念事業

京大における大規模な創立記念事業は25周年から始まり、50周年、70周年と行われてきた。過去の記念事業を見ると、記念式典や記念施設の建設のほか、学内を一般市民に開放しての展示、講演会などの祝賀行事が盛大に行われ、構成員の親睦を深める場として機能していたようだ。その一方、70周年時の『京都大学七十年史』の刊行などは、創立記念を歴史の節目として捉えた事業であり、創立を祝う場が自らの歴史を真摯に振り返る場でもあることを示している。



創立25周年記念式典。1922年6月18日に文学部陳列館前の広場で挙行された。(4-157)



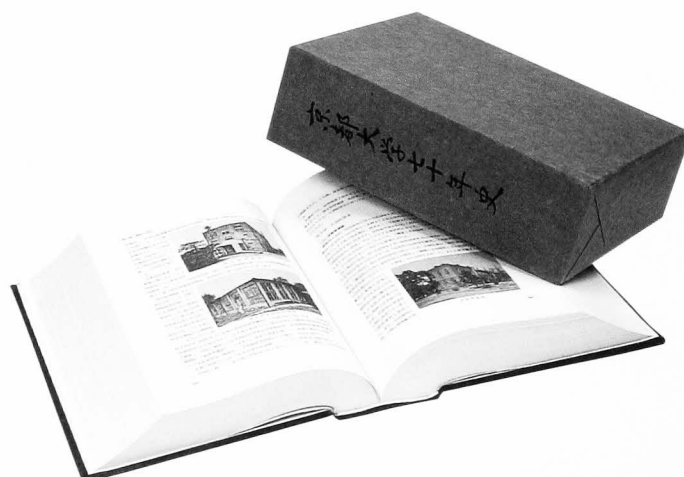
25周年の学内開放時の本部構内。最新研究の展示など、一般市民が普段は見られない大学内部の公開に注目が集まった。工学部土木教室本館前の賑わい。(4-158)



創立50周年記念祝賀式会場入口。1947年10月25日に農学部グラウンドで挙行された。(4-159)



創立70周年記念式典。1967年11月3日に京都会館で挙行された。(4-160)



『京都大学七十年史』。戦後初めて編纂された京大の通史。(4-161)